

# アシニア

号 1970.10.7.

学苑会情宣一部  
委員長 小島保雄

(連絡室——110号室)

## 卑劣！民青「黒崎」の 居直りを断じて許すな！

理が失、民青のデント上げによる暴力もイマイテ「暴走車」を運営する。毎度お黒崎事件、十月五日、彼自身が書いた「自己批判書」を保護し、十四六日に公開される。ハレハラの行為として取扱う。

十五五日、黒崎の一派は地下に「学生部」事務室の中に、「八百法」「入色体制」「入管斗争」を宣傳するため、40名も来ておりた所、三箇所で黒崎がデント上げを発表されかねないとして「反対運動」してしまった。我々は彼の時ども、教諭の中止を認めた。一九七〇年四月「学生大会」、今年四月「学生大会」、今年七月「学生大会」でアピール運動につけて我々は彼に賛成した所、彼は一切、民青の持つてゐる「反革命的暴力」をヒタ隠して見しめ、起々極めて内省なる所、並びにしか遠慮できえなかつた。その後、教諭会全体会員のものにする所の、二の禮事会場でマイクを使つて討論を行つたのである。

その結果、黒崎は我々に徹底的に譴責され、彼がこの向行を行つてまでこのまま全体会員に自己批判したのである。

しかし、しがしながら学生反論者、彼は、日共リ民青に渾濁されどか、堂々と「学生会」の名で、ビル立派、前田の「自己批判書」を掲載するといつて、進行させ、黙つてのけでのある。あきづき、車両過多さでモビリティアゲ、数十人以上するリンクサウス、政治教師の頭をかみ、ダバゴの火などした。などと、彼らがよく行う「歴史の暴行戦」を行つた。我々は、その「居直り」を絶対に許さない。それは、60年安保当時から、貴して黙認強制を行ひ、大參院に受けたときに想に対する「我々の眞に「斗争者」からの次のムチであるのだ。

十月六日、民青の手に「自己批判」の内容として「個人的政治活動禁止」を行なはうことを強制されたのである。我々は、民青が中大で行なつてゐることをしやしない。我々は、民青が、六八年七月三日以来、デモアピール充会のねど、全二部の学生抗議に落とし入れられた責任を追及し、いつたのである。これは、民青が「斗争者」としての責任を行使したのとは全く異次元の問題である。我々は大槻的に公而して討伐をしていったのである。

全二部の学生反論者、民青とのガライアーデントアピール会は、我々が追及するまでもう。しかし、我々の目的は民青を討伐することではなく、自らの存続を押しさうとする。民青は我々を攻撃することを主に目的にしている。我々は、明確に国際暴力と斗争中で、我々の眞の「自己」を追求する——民青は、一切國家暴力と斗争することを拒否し、右翼的半制半暴者としての位置に自らの存続を押しさうとする。あまつさえ、我々に対しても「暴力」をもって対決していく。

全ての学生反論者、君達の「學生」としての在り、「人民」としての在りを攻撃せよとほしい。君、我々と共に生きておこうではないか！

次に、十月五日の黒崎の自己批判の内容を明示しておくる。

一、一九六八年七月三日の「学生大会」に出席しては、我々が参加したことによって、

二、一九六八年七月二九日、二文を中心とする反対に反対して、テロルを犯すことを認めた。我々が争う去つた所では、我々は必ず直面します。

以上、四項目を自己批判します。なる、今後我々は「学生会全体会員が集まつて」なる名前は、私たる使用しないことを誓います。